博物館学雑誌　第33巻　第１号（通巻47号）149～162ページ 2007年12月

【報告】

都市部における地域博物館活動の一視点
－白根記念渋谷区郷土博物館・文学館を例として－

粕谷　　崇※

Takashi KASUYA

１．はじめに

地域博物館をどのようにとらえるか、この問題は多くの方々が論じている[1]。博物館が題材とする「地域」をどの範囲に絞るか、これによって博物館の活動は大きく左右されるといっても過言ではない。一般に、地域博物館としては都道府県市町村立の博物館が、行政区の範囲に限ることが多く、川や湖をテーマとし、地域を捉えている博物館もある[2]。

当館は、2005年（平成17）７月９日に白根記念渋谷区郷土博物館・文学館としてリニューアルオープンした地域博物館である。東京都特別区23区内では、ほとんどの区で博物館や資料館、美術館、文学館等が開館し、各々活動をしている。そのため当館は博物館施設としては後発にあたっていること、さらに東京には数多くの博物館があること、これらを踏まえ、博物館を建設するにあたり、他の博物館に比べどのような特色を出していくかが課題となっていた。

その打開策として、博物館の基本構想や基本計画を策定するなかで、当館の基本理念の中に、区内の大学や文化施設との連携が活動骨子の一つとなったのである。

今回、大学と当館とが特別展の共催を行った事例を報告しながら、都市部における地域博物館の活動のあり方について、考えることとしたい。

２．郷土博物館・文学館の基本理念

当館は、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館という名称である。博物館と文学館が並列で名称に使われているのは珍しいことではないだろうか。これは、当館の開館までの経緯によっており、その内容について若干触れるとともに、基本理念について述べることにする。

※白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員

平成19年７月12日受理

2-1．博物館・文学館開館までの経緯

当館の前身は、1970年（昭和45）に渋谷区立中央図書館内に設置された「郷土資料室」である。その後、1974年に渋谷区の区議会議員をされていた故白根全忠氏から、「区の文化事業に使って頂きたい」ということで、木造の2階建ての建物と土地が寄贈された。そこで渋谷区は旧白根邸を博物館施設にする方針を決め、翌年の1975年、「渋谷区立白根記念郷土文化館」として開館した。それゆえ博物館の名前に「白根」という名前が入っているのは、このことに由来している。

ただ、木造2階建てであるため、文化館を運営する側でも博物館として活動するには様々な制限があった。その一方で、「より博物館としての活動ができる館をつくって欲しい」という区民からも要望書が提出され、区としても郷土博物館建設の動きが、にわかに浮上した。それが1990年である。この時、まず基本構想素案が作られ、博物館と文学館を別々の場所に建て、連携しながら活動を行うことも、計画の中に盛り込まれていた。

そこで渋谷区教育委員会も、1993年（平成5年）に渋谷区郷土博物館（仮称）建設準備会（以降、建設準備会）を発足させ、博物館基本構想書の策定を行っている。さらに1994年、実際の実務を担当するための郷土博物館建設のための組織、正式には渋谷区郷土博物館等開設準備会が発足した。翌年には、文学館検討委員会も発足し、博物館と文学館の2館を別々に建てる方向で、着々と進んでいたが、博物館の準備が基本構想、基本計画、基本設計、実施設計まで進み、いよいよ建築までいったところで暗礁に乗り上げた。ちょうどバブル崩壊による財政の悪化や、福祉充実の急務など様々な問題が浮上したのである。計画は凍結状態になり、同様に、文学館の開館準備も基本構想書の策定で身動きが取れない状態となった。

このような状況下で方向を見失った準備会であるが、新たに方向を探ることとなった。ちょうどこの頃、滋賀県立琵琶湖博物館が開館し、その開館までの館の活動が紹介された時期である。準備会も、琵琶湖博物館の例に習い、「いつの日か博物館が開館する」のを願って、開館前から講座を実施することとなった。

実際に行った事業は小学生向けの夏休みの体験学習講座、あるいは社会人向けの「渋谷を知る散策マップをつくろう」という講座であった。後者は、参加者の方々に実際に散策マップを作っていただくもので、この活動については拙稿で、すでに紹介している[(3)]。

このような事前の地道な活動を進めていた折、2001年（平成13）、21世紀になって、区としての方針が、新たに決定された。それは白根記念郷土文化館を全面リニューアルするものであった。2002年度から建築設計と展示設計の見直しが行われ、計画は当初、博物館を文化館の所在する場所に建設するという方向で動いていたが、2003年に「文学館も一緒にする」という方針が急遽付加された。これによって、博物館のみの設計から、文学館の機能も併せ持つ館として設計変更され、建築が開始された。このような経緯を経て、2005年7月9日に白根記念渋谷区郷土博物館・文学館としてリニューアルオープンした次第である。

2-2．館の基本理念

ここでは、当館の基本理念で求められた活動の方針を紹介し、都心部における地域博物館とし、

どのような博物館を目指しているか確認したい。

1）「渋谷学」

渋谷区は「自然と文化とやすらぎのまち　渋谷」として親しまれてきた経緯から、当館は、渋谷の自然と、そこで培われてきた文化を継承し、さらに創造し、新しい文化を形成することを目的としている。それを総合して「渋谷学」が提唱された。

「〇〇学」はちょうど2000年前後に、様々な地域で産声をあげている。たとえば「東北学」などがその例として挙げられ、雑誌も刊行されているものもある。この「〇〇学」は一つのブームのようにもなったが、博物館史的には、博物館が取り扱う地域の総合的な分析、研究をおこなうものとして、加藤有次らによる秋田県立博物館構想などですでに提唱されている[4]。

当館でも、博物館を構想するなかで、「渋谷学」の確立が館の指針として取り上げられた。ファッションの街など、時代を動かす街として渋谷は取り上げられることが多い。その土壌となったもの、あるいはこれからの渋谷を形成して行くものを総合的に追究して行くことが当館の一つの指針とされた[5]。

幸いなことに、当館のすぐ近くに所在する國學院大學でも、創立120周年記念事業として「渋谷学」が取り上げられていた[6]。この時はまだ博物館・文学館の建設が正式に決まっていない段階であり、白根郷土文化館として資料の協力をさせていただいたが、連携という発想が残念ながらこの段階では生まれることがなかった。

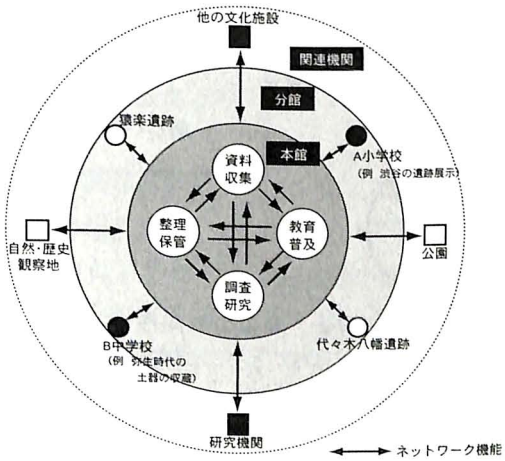

図１　博物館機能図

2）総合性・交流性・拠点性

博物館の事業活動・運営をしていくうえで、当館では３つの柱を掲げている。それが、総合性[7]・交流性・拠点性である。

総合性とは、事業内容を広く展開するようにし、単に特定の分野に限定することなく、総合的な視点で「渋谷らしさ」を探求できることを目指している。当館は「渋谷」に密着した地域博物館を目指しているが、それゆえ渋谷の場合、どうしても活動のテーマなどが、ファッションをはじめとする、一般に渋谷をイメージするものに固執しやすい。そのため、渋谷を広い視野で分析することが活動の一つの柱となっている。

交流性とは、「ひらかれた」博物館として、博物館利用者と博物館、学芸員との交流や、学校教育との交流を実現することである。当館の基本構想・基本計画が策定された頃は、1990年以降であり、博物館の活動について「体験」や「連携」、「融合」という言葉が多用されていた時期である。当館でも活動について、一方向的な事業展開ではなく、「人」・「もの」・「事」に出会い、交流が生まれる仕掛けづくりが目途となっている。

拠点性とは、他の施設とネットワークや連携を結び、それぞれのパイプライン役となる事業を博物館が推進するということである。当館が渋谷という場所で培われてきた、地域文化の伝承と創造の中核施設として位置付け、渋谷に暮らす人々への文化・情報の発信基地としての役割を果たすものとして考えられた。

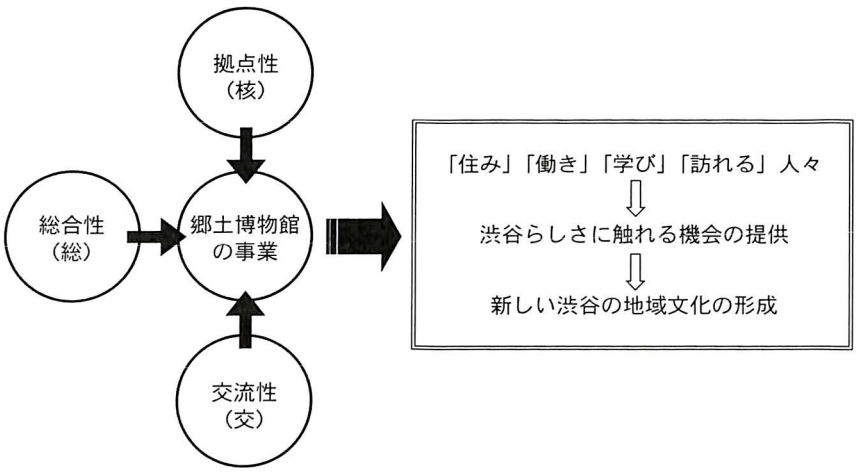

図２　事業の方向性

３．博物館と大学との連携

博物館の基本理念は、当館が運営して行く中で大きな方針となっているが、実際に博物館を運営するにあたって、まず取り組んだのが、大学との連携である。

３-１．当館の位置と環境

ここでは博物館の地域社会、博物館と周辺地域との関わり方について考えてみたい。

当館は、東京都渋谷区の東側に所在する。近辺には学校をはじめとする文化施設等が集中して

おり、区立小・中学校にはじまり、青山学院や國學院大學、都立広尾高校、実践女子学園もある。少し離れるが聖心女子大学、東京女学館もあるほか、文化施設として温故学会（塙保己一史料館）、区立渋谷図書館などもあり、当館は、渋谷区で所謂文教地区に指定されている一角に立地している。

さらに、目を区内全域に向けてみると、文化女子大学などの大学や専門学校も数多く所在する。特に渋谷というと、ファッション関係が注目されるが、それ以外にも写真や、アニメーションなど多種多彩といってよいだろう。

このように、当館を中心とした半径2km圏内にはこうした学校関連の施設がたくさん所在しており、まさに都心部の利点といえる。この利点をどのように生かすか、基本計画でも述べられているように、館としてもいろいろな連携、あるいはそれに相当する事業を実施するための具体的な施策が検討課題であった。

3-2．博物館と大学との連携の背景

そこで当館の場合、隣接する國學院大學との連携、つまり博物館と大学の連携について、最初に取りかかることとなった。

大学は教育研究機関である。博物館自体も研究機関の要素を持っているが、大学は博物館と異なる。様々な分野の研究者が最新の研究をしており、これまでの学問の蓄積と新しい研究の情報が所有しているということである。さらに加え、研究に付随した豊富な学術資料も蓄積されている。

博物館の機能は、一般に資料収集、整理・保管、調査研究、教育活動とされる。この機能が相互に影響し合いながら、円滑に機能し合うのが理想とされる。この機能を、たとえば大学と比較した場合、すべてが厳格に当てはまるのではないが資料収集、整理・保管、調査研究、この3つに関しては蓄積がこれまでになされてきたと考えられる。研究室・大学図書館など、そこに蓄積された情報は膨大である。

しかし、博物館の「教育活動」的な内容の部分、つまり大学の学生に対しての教育、専門的な研究者を育てる教育に特化するあまり、外へのアピール、すなわち一般社会への働きかけは脆弱であった。これはかつて最高学府としての大学の弱い部分であったと考えられる。今日では社会のニーズと相俟って、大学における公開講座は花盛りである。それに加え、大学の資産としての学術情報や収集した資料を展示する博物館や資料館が、1980年代に矢継ぎ早に旧帝国大学を中心とした国立大学でも作られるようになった。近接する國學院大學の場合、歴史の古い考古学資料館や神道資料館がある。しかし全体の大学数からいえば、まだ博物館施設を持っている大学は、割合として現状ではまだ少ないといえるだろう。

また文部科学省も、大学に向けてオープンリサーチセンター（ＯＲＣ）構想設立の研究補助もおこなっている。これは大学に蓄積された情報を、研究者に広く公開するものであり、「開かれた大学」が要求されている。

このような状況下で、大学側もお膝元である各自治体とどのように関わって行くかという点を

模索しており、既にいくつかの大学では自治体と連携の協定を結んでいるところもある。博物館も教育研究機関である大学と共同で事業を企画したり、あるいは研究をすることが可能となってきている。よって「開かれた」を目指す両者が歩み寄れることは十分可能であり、この時期を逃すことなく連携について検討する必要があるであろう。

かつて、広瀬鎮が旧版の『博物館学講座』の中で、大学と博物館との関係について触れている[8]。広瀬は博物館における研究が大学における研究と、研究そのものの価値において優劣が存在しないことの議論が充分になされていないことを問題視している。その中で注目すべき点は、大きな枠組みの中では博物館は研究機関であり、同じ研究機関である大学に対し、地域を研究するという研究レベルでは、大学に引けを取っていない、むしろ勝っているところもあるという指摘である。さらに、大学が地域社会における関係が乏しく、大学の課題としている。このように博物館と大学との関わり方は当時も議論の対象となっており、博物館の研究活動の評価が認められていない指摘も見逃すことは出来ない。

約25年後の『新版博物館学講座』では、その状況が大分変化してきている。鷹野光行は大学との連携について平成11年度版『博物館白書』[9]を資料に、博物館と大学とがどれだけ交流・連携がなされているかを指摘している[10]。すなわち、アンケートで回答があった館のうちの22.2%が交流・連携を実施し、その交流相手の82.2%が大学であること、82.2%のうち「動水植」の館園が52.3%、「自然史」が47.3%であることを示し、他の館種よりも飼育・栽培の情報交換や飼育動物の交換など交流を進めやすい状況にあることを述べている。これでもわかるように、大学との交流・連携が理系・自然史系に比べ、人文系の博物館はまだ進んでいない。これは地域研究という意味で、これまで博物館と大学とが共通のテーマを持ちにくいことに起因していたと考えられる。

さらに、昨今の大学と地域との関わり方は着実に進んでいる。これは文部科学省がオープンリサーチセンターのほかにも大学の地域貢献を進めているためであるが、技術的な分野から教育、芸術の分野まで、多くの取り組みがなされている。例えば、京都橘大学の文化政策学部の活動など、地域と大学との取り組みは新しい展開と考える[11]。

4．連携の実例１―特別展

先に述べたように当館がリニューアルオープンするにあたり、博物館活動の中で、大学との連携が議題となっていた。その最初の事業として、大学と特別展を共催するという手段が選ばれ、まず國學院大學と試みることとなった。

4-1．連携までの経緯

國學院大學では、1999年度（平成11）から学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」が実施されていた。これは主として神道考古学の重鎮大場磐雄博士など大学が保有するガラス乾板のデジタル化が事業の中心であったが、その他にもスライドフィルムや絵葉書のデジタル化なども行っている。この研究は、國學院大學の所蔵資料を中心に行われ

ており、そのなかで宮地直一博士の資料や、折口信夫博士の資料もその研究対象の分野に入っていた。研究が進み、デジタルデータが蓄積し始めると、大学側もその研究の成果を発表できる場がないかを求めていた。

ちょうどその頃、当館がリニューアルオープンを控えており、前述したように大学との連携が課題となっていたことから、展示などで共催できないかということで一致し、特別展を開催する運びとなった。

4-2. 特別展「天神像―天神さまと天神人形―」

2005年度の最初に共催する特別展としての題材には、宮地直一博士資料の「天神人形」が選ばれた。宮地博士は神道の研究のほかにも、明治神宮造営に関する実務の中心的役割を果たしていた方で、渋谷との縁もある研究者である。

この展示をするにあたり、大学側と博物館側で協議を何度も開催しているが、その協議の中で、論点となったのは、天神人形をどのように展示していくかであった。博物館側としての展示の考え方と、大学としての展示に対する考え方の、刷りあわせである。分りやすい展示か、研究面を押した展示なのかという問題である。協議の結果、やはり一般の方々に「天神さま」、「天神人形」を理解していただく方向で、やっと意見が一致した。具体的には天神さまの成り立ち、どんな神様なのか、そのあたりも含めてまず紹介し、あわせて各地の特色ある天神人形の資料を展示してはどうか、ということになったのである。

展示の構成について簡単に触れると、まずは「プロローグ」で天神さまの誕生の説明、次に「天神人形　そのかたち」、「縁起絵巻からみた天神人形」、「天神人形のひろがり」と各地の天神人形や由来の紹介をしている。次に「天神人形をつくる」ということで人形の作り方の紹介、そして宮地博士の業績等を紹介しながら宮地博士が収集された神像などを展示した「宮地博士と天神さま」、最後に「エピローグ」ということで、天神人形以外の絵馬等も展示した。

特別展にあわせ、講演会、展示解説、フォーラムを開催している。講演会は博物館側の主事業とし、展示解説とフォーラムは大学主催とした。

4-3.「折口信夫の世界―その文学と学問―」

翌年の2006年度は、渋谷に居を構えたことのある折口信夫が、生誕120年を迎えた年であったため、彼の特別展を開催した。彼は大阪から國學院大學に進学し、その後國學院大學や慶應大學で教鞭をとったが、歌人であり民俗学や芸能史などの研究者でもあった。展示構成は1）折口信夫の生涯、2）釋迢空の文学、3）歌舞伎と折口、4）折口信夫の学問と、折口の二つの顔を紹介する内容である。

また、彼は歌人・詩人・作家でもあり、歌集や著書を刊行した。その中の折口の小説『死者の書』は、映画化されていたことから、展示にあわせ、『死者の書』を人形アニメーション化した川本喜八郎の人形も展示した。このほか、映画『死者の書』の上映、川本喜八郎氏と評論家の安藤礼二氏対談講演と展示解説を行っている。映画会や展示解説は小川直之教授を中心とする大学側が主催し、対談講演会は博物館側が主催した。また、当博物館の場合、上映会場・講演会場と

して大学の講堂を借用した。映画の上映２回と対談講演会に参加された方々は、合計で700名を優に越えている。

写真１　特別展「天神像―天神さまと天神人形―」

写真２　対談講演会（右：川本喜八郎氏　左：安藤礼二氏）

５．連携の実例２―企画展

５-１．企画展・渋谷の現代像

当館の２階は博物館の常設展示室となっている。この展示室の最初のコーナーに、僅か５㎡であるが、ショーウィンドーケースが設置されている。ここは「現在の渋谷像」として、日々変わる渋谷を記録し、伝えて行こうという趣旨のもと、毎年、展示替えをして行くように作られている。いわば、ミニ企画展示である。

この「現在の渋谷像」は、新宿や池袋などとは異なる「渋谷らしさ」・「渋谷の源泉」を考慮しながら、若者たちの目に写る「渋谷のいま」、「流行」をチェック・検証し、その内容を様々な手法で表現するためのものである。展示項目としては、たとえばファッションであったり、建築であったり、１年を通してあるいはその度ごとにテーマを抽出し、展示することにしている。学芸員が企画する場合もあるが、基本的には若者、大学生や専門学校の生徒に協力を得、展示していこうというのがねらいである。

５-２．企画展「渋谷はいま」

2006年度は、題材をファッションとし、文化女子大学服装学部服装社会学科の小山昭男教授・申恩泳准教授にお願いし、学生の制作案の中から作品を選び、展示することとした。

展示内容は１）「SHIBUYA COLLECTION」と２）「渋谷はいま　スクランブル」で、２期に分けて展示した。前者の内容は、渋谷区内のファッションエリアを５つに分け、そのエリアをコレクションのステージ（＝駅）に見立てたものである。具体的には、代官山、渋谷、明治神宮前、原宿、表参道の駅をステージに、各駅ごとにその周辺に見られるファッションを株式会社タ

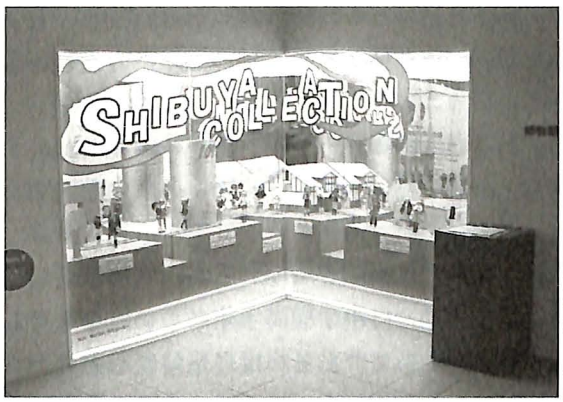

写真４　シブヤコレクション

写真５　展示作業風景１

写真６　渋谷はいま　スクランブル

写真７　展示作業風景２

カラトミーの協力により人形（ジェニー人形）に着せ、表現したものであった。

後者は、渋谷駅前のスクランブル交差点が渋谷の玄関口であることから、ここから渋谷のストーリーが始まると考え、スクランブル交差点を舞台に、渋谷のファッションを取り上げた。具体的には、ファッションスタイルを「大人ぶった小学生」「刺激を求めて集まる女子高生」「日々仕事や時間に追われているサラリーマン」の３タイプに分け、その服装をマネキンに着せ、表現するものであった。

６．連携に関する課題と今後の方向性

これまで、具体的な展示における大学との連携の例を挙げた。ここでは、実際に事業を実施したことでの問題点、課題を取り上げながら、今後の方向性についてまとめることにする。

６-１．企画の発案について

まずは、企画の発案がある。特別展の場合、2005年度は天神人形、2006年度は折口信夫を題材に展示をしたが、今後、大学の膨大な学術資料の中から、あるいは研究している分野から何をテーマに選び出すかという問題である。換言すれば、大学のねらいとするところと博物館のそれとが、一致している場合、あるいは異なる場合、どのように刷り合わせていくかということである。特別展の場合、大学側の担当と博物館学芸員とで、何度となく打ち合わせをし、方向性の統一を図った。その中で、注意した点がいくつかある。

第１はそのテーマが一般に受け入れやすいのか、あるいは話題性があるのか、話題性をつくれるのかという点である。博物館の特別展や企画展を企画する場合でもそうだが、あまり研究者向けのテーマでは、集客的な面で問題である。

第２は、展示内容の難易度、レベルの問題である。当館では来館者層の想定から、展示内容のレベル、解説文のレベルをある程度決め、常設展示も基本的には小学校高学年あるいは中学生レベルにしている。このことは、博物館では学芸員が展示において、あるいは展示解説などにおいて常日頃気をつけている点である。しかし大学博物館において大学が展示をするのではなく、当館で展示をする場合、大学生レベルをそのまま展示することはできない。専門用語の解説にはじまり、解説文の内容も留意する必要がある。

さらに、企画という点においては、当館では基本構想のなかで「渋谷学」が提唱され、基本理念の中でそれを実行することが指針に挙げられている。館のリニューアル準備中に、國學院大學では独自に「渋谷学」の講座が約３年間開催されたが、当館と共同で開催できなかった点は非常に残念であった。

当館としては、「渋谷学」は単に博物館や大学のみではなく、企業や地元住民を含め構築していくものであると考えている。言うまでもなく「渋谷学」をするということは、渋谷を研究することである。それを実践することによって、渋谷についての様々な着眼すべき点が明確化され、そこから展示に限らず、活動のテーマが拾い出せることになるだろう。その意味では、「渋谷学」を推進するということが、単に博物館と大学との連携のみの問題ではないことは明白である。

6-2．役割の分担について

公立博物館と大学という違う組織が連携して一つの事業を行うということは、博物館の担当者と大学の担当者とが実務を進めるにあたり、どのくらい上手く調整できるかという問題である。通常、博物館の特別展では学芸員がすべてを担当することになる。しかし大学と連携して行う場合、大学側の担当者もいる。それぞれが一人、あるいは複数でやることになるので、図録制作とか展示制作とか、双方が意思の疎通をもって実務を進める調整が必要となる。その主たる調整役は、学芸員が担当し、舵を取っていくことがやり易いであろう。

さらに、大学と博物館が連携して事業を行う場合、共催なのか、大学が後援なのか、協力なのかの問題である。当館は区立であり、やはり共催であれば事業費の負担割合ということが問題となった。折口の特別展の場合では、大学側の映画会の費用負担、大学関係者の執筆料の無料化など、非常に事務的なことではあるが、経費の負担割合を明確化した。

また広報活動も同様である。ポスター・チラシを配布するにおいても博物館と大学とでは配布先が異なる場合がある。どうやって戦略的に広報活動をし、来館者を増やすことができるか。連携の利点を生かすためにも、事前の準備を綿密にしておくことが必要である。

6-3．今後の方向性

博物館と博物館、博物館と学校など博物館をめぐる連携のあり方は、これまで様々な形で取り上げられ、そしてそれを実現しようと試みがなされてきた。小学校や中学校の学校教育と博物館との関係は、この20年の間に大分改善されてきた感がある。しかし、博物館と大学との関係はどうであろうか。

本稿では、大学と博物館とが共同企画をし、特別展と企画展の事例を報告しながら、大学との連携について考えてきた。今現在、大学も「開かれた大学」が求められており、大学との連携しはやすくなっている。当館を含め、都心部に所在する博物館は大学と共同で研究をし、それを特別展や講演会などの事業に反映させることは、一つの方法ではないかと考える。特に小規模な博物館施設の場合、研究面ばかりでなく、事業の拡大を図ることができる。昨今の博物館事情で、予算の縮小はどこでも行われている。その解決策としても、このような連携は実現しようという目標ではなく、現実に実施することが博物館をより活性化させることになると考える。

また、大学生を含めた企画は、研究者、あるいは学芸員を目指す学生にとって、自分の研究が博物館で展示されることとなり、その教育的効果は多大である。ついでは、次の研究者・学芸員を育成する役目として、一役を担うことになるであろう。

7.「渋谷学」のこれから

博物館の活動は地道なものである。すぐに結果がでるとは限らない。しかし、何もやらなければ、始まらない。

博物館の基本理念、ここで述べられた内容は、その博物館の使命ということである。当館の場合は、その一つが「渋谷学」構築であり、それにあわせて当館を巡る様々な施設と連携を結び、

活動して行くことである。本稿では大学との連携のあり方について、当館が実施してきた事例を通して考察した。これからも区内の大学と繋がりを持ち、新しい視点で渋谷を検証していきたいと考えている。

最後に、今後、「渋谷学」を博物館において実現して行くための基本的な事項を確認しておきたい。

まず第1は、地域の人々が主役であることである。

これまで「〇〇学」（＝「地域学」）と博物館の関係については、高橋信裕による論考[12]などがあり、そこでは「地域学」が目指していくもの、あるいは「地域博物館に求められているもの」等、論点がまとめられている。そこで高橋も指摘しているが、博物館が「地域学」に向き合う場合、当館でもやはり市民、地域住民との関係が特に重要になると考えている。

「渋谷学」を例にすれば、本来「渋谷学」は単に講座として終わるものではない。継続して渋谷を研究して行く必要がある。大学で実施された「渋谷学」の講義内容は右表に示した通りであり、渋谷の自然から歴史、そして経済分野までに亘った。講座を受講された方も、地元の方々や地元企業、大手企業の方々と幅広いものであった。しかし、残念ながら、そこから先に進んでいるかといえば、あまり芳しくない状況にある。それは、講座という形から脱却していないところにある。「地域学」の場合、やはり主役は地域住民やそこに関係する人々、さらには地元企業である。この主役が動かなければ、始まらない。それを表で、あるいは裏方でサポートしていく役割が地域博物館にあると考える。

そのサポートの方法として、第2は、研究し発表ができる場を博物館が提供できることである。

単に講座を受けるのではなく、研究においても、大学や博物館の学芸員だけが研究を行うのではなく、市民も市民学芸員として、その一員として研究できることも必要である。その活動の拠点が博物館であり、その研究成果を博物館で発表したり、あるいは常設展や特別展に反映できるような体制を整備することが欠かせないと考える。このような市民の活動を博物館の展示に活用する例は、すでに一部の地域博物館で実践されているが、

1）渋谷の風水土
2）民俗都市としての渋谷
3）渋谷の遺跡ー埋もれた古代人の生活
4）古代における関東の動向
5）中世武蔵の武士団と渋谷
6）江戸の発展と渋谷村
7）近世渋谷の農業と街道、信仰
8）都市化する渋谷
9）大東京と渋谷
10）渋谷と文学
11）渋谷の再生とヤミ市
12）高度成長と渋谷の変貌
13）若者の街渋谷の形成ー渋谷の再開発と商業化
14）エリアとしての渋谷と人々
15）カリスマの街ー渋谷の神々
16）渋谷は作られるー渋谷の文化
17）都市交通と渋谷
18）沿線開発と交通政策
19）渋谷の都市形成と現状
20）都市計画の推移と将来像
21）地域経済の現状と産業振興
22）商業地としての渋谷
23）地域行政の現状と区の役割
24）市民参加型の行政を目指して

表　「渋谷学」の講座内容

自分の、あるいは自分たちの成果が公表されることは嬉しいことであり、その後の研究や活動のエネルギー源にもなるであろう。

そして最後に第３のポイントは、次に伝える、「継続」「継投」ということである。

「地域学」で学んだことは、その人だけあるいはグループだけで幕を下ろしてはいけない。次の人へのバトンタッチも重要な問題である。また、題材となる地域は時代と共に変化していく。他の人へ、あるいは次の世代へ、さらにその次の世代へと研究の継続・継投していくことが、「地域学」には欠かせない要素であると考える。

以上、「渋谷学」を当館が進めていくにあたり、その基底となる項目を触れた。これから、「渋谷学」を実践するにあたり、つぎの段階は学校との連携であると考えている。つまり、渋谷区立のほとんどの小学校には、「郷土資料室」「校史資料室」がある。この資料室と、すなわち小学校と当館とがどのような形の連携ができるかが、当館の次の課題である。

【註】

(1) 伊藤寿朗　1986「地域博物館論―現代博物館の課題と展望」『現代社会の課題と展望』明石書店、湯浅治久　1995「地域博物館のあり方をめぐる雑感　現場から発信する一提言」『明治大学学芸員養成課程年報1994年度』10、中野知幸　2004「地域博物館論の考察」『國學院大學博物館學紀要』第28輯など。

(2) 例えば地域博物館として様々な活動をしている平塚市立博物館は相模川、滋賀県立琵琶湖博物館はその名が示す通り、琵琶湖がテーマとなっている。

(3) 拙稿　1999「参加・体験型講座の一試案―散策マップ・ガイドの制作―」『國學院大學博物館學紀要』第24輯。

拙稿　2005「参加・体験型講座小考―散策マップ・ガイドの制作　その後の展開―」『國學院大學博物館學紀要』第29輯。

(4) 加藤有次ほか　1972『秋田県立綜合博物館設立構想』秋田県。また加藤は、彼の著『博物館学序論』(1977　雄山閣出版）のなかで、秋田県立博物館構想を取り上げ、構想の中で提唱された「秋田学」について論じている。

(5) 加藤有次は「Ⅱ　地域社会と博物館」『新版博物館学講座３　現代博物館論―現状と課題―』雄山閣のなかで、地域博物館の目的理念そもそもが、地域学の樹立であると述べ、地域博物館においての地域学の重要性を説いている。

(6) 國學院大學120周年事業として、公開講座「渋谷学」が2002年度から開催された。開催にあたり、大学としては2001年の秋から講座の推進者である上山和雄教授、三溝博之教授らが中心に研究会が開かれ、講座開講に当たっての準備期間が設けられていた。

講座の内容としては別表に示した通りであり、渋谷の風土、歴史、経済など多分野から渋谷を抉る、初めての試みであった。

なお、講座の具体的な内容は、ホームページの「シブヤ経済新聞」でも紹介されている。

http://www.shibukei.com/special/145/index.html

(7) 当館の基本構想や基本計画において、「総合性」の表記は「総（綜）合性」であった。ここでは、文字の意味的には「綜」の意味として使用しているが、表記上「総合性」としておく。

(8) 広瀬鎮　1974「Ⅱ　現代社会と博物館　5　研究機関としての博物館　B　大学と博物館における地域研究」『博物館学講座４　博物館と地域社会』雄山閣出版

(9) 日本博物館協会　1999『日本の博物館の現状と課題　博物館白書平成11年度版』

(10) 鷹野光行2000「B　その他の機関との連携・交流　2　博物館のネットワーク　Ⅲ博物館相互の協力」『新版・博物館学講座　第４巻　博物館機能論』雄山閣出版株式会社

(11) なお京都橘大学の文化政策学部は、平成17年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」（現代ＧＰ）に採択されている。さらに来年、現代ビジネス学部都市環境デザイン学科に名称が変わる予定。また来年度からであるが、当館に近接する青山学院大学でも、青山や渋谷駅周辺を含めた地域を素材に、新しい文化芸術を追究する総合文化政策学部が誕生する。

(12) 高橋信裕　2001「地域博物館における地域学の課題と展望」『文環研レポート』17号